

教界の長老諸師に呈す  
聯合教育機關を建設せよ

澤柳政太郎	高楠順次郎
村上 專精	富士川 游
藤岡 勝二	前田 慧雲
岡田 良平	常磐 大定
片岡 國嘉	高島 圓

生等、深く我が佛教界の現状に慨する所あり、謹んで教界の長老諸師に對し、各宗協力のみ風宣揚せられむ事、殊に完全なる聯合教育機關設立急要に就き、茲に一書を呈するの光榮を有す。

現在、我が佛教各宗が歳出入の約三分の二に相當する多額の教育費を投じて、各々大學を設置し、而も其の結果は曾て學者らしき學者を出さず、宗教家らしき宗教家を出さず、又一般社會に活動して嶄然たる頭角を現はすべき世間的人材をも出さず、從つて教理の研究信仰の宣傳共に萎微沈滞して、不振を極めつゝあるは諸師の夙に熟知せらるゝ所にして教界に人物を缺くこと蓋し今日の如く甚だしきはなかるべし。昔は僧侶の社會に立つや常に其の當時に於ける思想界の權威として、一世の崇敬尊信を博せり。然るに今や全國十萬の僧侶中、能く時代思想を解して之と追隨し得るもの果して幾許ありとするか。是れ實に主として各宗大學の組織設備の不完全にして低級なるに歸せざるを得ず。

近時、歐洲に於ける佛教研究の盛なるは諸師の亦善く知了せらるゝところにしてサンスクリットの研究にせよ、パーリ語の研究にせよ、發掘原典の研究にせよ、獨佛英露の東洋學者皆甚深の造詣を以て堂々の大名を天下に馳す。然るに我國に在りては、各宗大學の振はざること前述の如く帝國大學に於いてさへ、その文科の一隅に印度哲學の一講座を有するのみ、從つて學者と稱せらるゝものもたゞ歐洲の研究を背景としてその糟粕を嘗むる者か、然らずんばたゞ訓詁註釋を是れ事とする謂はゆる活字引の類に過ぎずと貶稱せらるゝも二三の例外を除いて誰か能く然らずと斷じ得るものぞ。凡そ今日佛教を研究するに於いて、最大の便宜を有するもの、我が國を措いて果たしていづこにありや。漢譯藏經の保存と其の研究の蓄積と歐洲學術の輸入と之を併せ有するもの實にたゞ日本あるのみ。故に今後に於ける佛教の研究は必ずや我國を以て其の中心と爲し、世界の諸學者をして我國に學ばしむるの概なかる可からず。是れ實に世界第一の佛教國にして且つ東洋第一の文明國たる日本の使命ならずや。然るに從來に於ける我國の佛教研究が爾く貧弱を極め居れるは眞に慨嘆に堪えずと謂ふべし。

更に實際的方面に就いて之を考察するに堅實熱烈の信仰を有する布教家の僅少なるがため、佛教と云えば單に愚夫愚婦の迷信に媚ぶる者として、一般社會の輕侮する所となり、諸種の社會事業の如き遠く耶蘇教の後塵を拜するにも足らざるの状あり。耶蘇教が女子教育に多大の力を用ゐ、中流以上の社會に於ける耶蘇教婦人の努力が殆んど牢乎として抜く可からざるものあるが如き皆我が佛教徒の深く耻ぢざるを得ざる所なりとす。

又朝鮮及び支那に對する佛教の宣傳が、常に耶蘇教のために其の機先を制せられ、徒に此の歴史ある先輩國の精神的滅亡を無視するの觀あるが如き、又佛教の最も嚴に禁制せる飲酒の惡習が我が佛教國に於いて聊も矯正せられず、此點に關して何等經典に説く所なき耶蘇教の諸國に於いて、却て禁酒運動の盛んなるを見、微々たりとは云え、我が國內に於ける禁酒運動も亦耶蘇教徒の手に依

りてのみ行はれ居れるが如き、又耶蘇教は巍然たる會堂を東京市中の各區に有し居れるに反し、我が佛教は一二小規模の會堂を有するに過ぎずして未だ代表的なる大會堂の一個をも有せざるが如き皆我が佛教徒の愧死に値する所にあらずや。

然らば斯くの如き佛教の墮落不振を救済するの道果して如何。生等の見る所を以てすれば教育機關の改善を以て最大の急務と爲さざるを得ず。今や我國に於ける諸種の大學及び専門學校は、皆比較的整備の域に達せり。佛教界豈一個の完全なる教育機關を建設し得ざるの理由あらむや。歐米に於いては多數なる基督教大學の存するあり、我國に於いてさへ、同志社大學を初として基督教學校の有力なる者決して少なからず。たゞ我が佛教界に於いて殆ど見るに足るの一學校を有せざるは寧ろ不可思議の現象と謂ふべし。然れども財政いづれも困難なる各宗が、個々別々の教育機關を有する現状を以てして如何に高率の教育費を支出するも到底その設備の完全を期し得べからざるは極めて容易き道理なりとす。此に於いてか生等は即ち聯合教育機關の絶對的必要を叫ばざるを得ざるなり。

若し各宗が眞に能く協力一致の精神を發揮し、今日の多數なる宗別教育機關を廢し、之に代ふるに唯一個の聯合大教育機關を以てするとせんか、各宗の負擔する教育費は從來に比して大いに之を輕減するとも猶其の總額は優に一個の完備せる大教育機關を經營するに足るべく、其の結果は各宗に在りては財政の緊縮となり、佛教全體としては初めて茲に實力ある人材養成の途を開き教理の研究信仰の宣傳に於いて、大希望ある中心機關を得るものと謂ふべし。勿論、宗乘の教授は各宗の任意とし現在の校舍を其儘に使用するとせば各宗にとりては何等失ふ所なくして得る所多かるべく、佛教全體としては復活の道に入る者と謂うべからずや。從來と雖も、各宗協力一致の必要は識者の公論にして諸師も亦久しく既に痛感せらるゝ所なるを疑はず。たゞ多年の因襲上其の實行を至難とするの情状あり。生等と雖も其の至難の情状を知らずして徒に不可能の空論を主張する者に非ず、然れども生等は今や遂に各宗諸師が決然として其の至難を排除し、其の不可能を可能にするの好時機が正に眼前に到達せることを確信する者なりとす。

今や世界は慘毒極めたる未曾有の大戦争を終り、謂はゆる世界改造の偉業に着手し一片の空想に過ぎざりし國際聯盟は既に其の實現の緒に就き、我國は人種差別撤廢の大理想を掲げて之に臨み、特に我佛教徒は其の教理の立脚地よりして世界永遠の平和を切望し、之を以て講和會議に勸説するの時機に際せり。世界永遠の平和を他に向つて勸説する者が自己の教内に於ける永遠の平和を確立し得ず、人種差別撤廢の理想を掲ぐる者が一教内の融合調和をさへもなし得ずとせば、其の理想其の勸説に於いて果たして何の光明あり何の權威ありとするか。是れ生等が此の好時機に於いて我が佛教各宗の協同一致を實現し且つ其の第一着手として先づ聯合教育機關の設立に努力するの急務を切言する所以なり。

言ふまでもなく宗教に派別を生ずるは其の發展上の自然にして基督教と雖も實に殆ど無數の派別を現出せり。たゞ彼等は他教に對する時、頗る善く協同一致の實を示す。我佛教が多くに於いて常に彼等に一籌を輸するの理由は實に主として此の點に存す。但し生等は必ずしも基督教を對象としてのみ之を論ずるに非ず。佛教々理の根本義よりして之を考ふるも差別に即して平等を説き、平等に即して差別を教ふるは誠に和合の眞諦を發揮する所以ならずや。

從來の歴史よりすれば我が各宗間の協同事業は殆んど悉く失敗に終れり。従つて将来の協同事業も亦必ず失敗に歸すべしと説く者あり。是れ道理なる推測たるを失はず。然れども、從來に於ける總ての失敗が即ち今日の教界不振を極盡せる原因なりとせば、此の人心一新の好機會に於いて、敢て百敗後の一成功を奏せしむるは即ち日本佛教を復活せしむる唯一の方策たりと謂ふべし。従つてそ

ここに識者先覺が最後の大精進大努力を試むべき理由あるを確信す。

近時政府の大學令改正の結果、各宗内に於いて大學組織の改善變更に關する論議と運動との開始せらるゝを見る。生等は上述の理由に依り特に此際に於いて各宗聯合教育機關の急要を認め、完全高級なる佛教研究の一大道場の設立を希望し敢て諸師の熟慮に訴ふ。但し法令形式の事は未なり。生等は必ずしも政府の大學令に依る單科大學を要望する者に非ず。又大學令の到底許容せざるべき、教科大學を夢想するものにも非ず。たゞ實質上東洋第一の佛教文明國として遺憾なき完全高級なる佛教研究の一大道場を翹望す。若し夫れ宗我に囚はれ宗制の規定を云々にして之に反對するが如きものありとせば、それは實に取るに足らざる頑冥愚昧の輩と稱すべく世界人類の大理想たる國際聯盟成立の爲には國家主權の一部分すら各國皆甘んじて之を抑制せんとするの新時代に在りて宗制に對して多少の變更を加ふるが如きは殆ど之を問題とするの價値なしと思考す。

『六大新報』第八百十二號、大正八年(1919)五月十八日、六大新報社、p12-p13